

唐代の「陳情」の詩について

- (12) 「唐摭言」卷二等第罷挙に、温岐（庭筠）（開成）四年とある。
- (13) 「唐詩紀事」卷七十や「唐才子伝」卷九などによる。
- (14) 例えば「唐兩京城坊考」卷三に、杏園、為新進士宴遊之所……とある。
- (15) 傅璇琮主編「唐才伝校箋」卷九では、「選限」を即、「吏部詮選」としているが、根拠が不明で、問題である。
- (16) 「唐才子伝」卷十張喬、「唐摭言」卷十など。
- (17) 安旗主編「李白全集編年注釈」は、哥舒翰への贈詩を天寶十二載、この友人への詩を開元二十五年に系年するが、確定し難い。
- (18) 例えば「大唐六典」卷二に、凡官人身及同居大功已以上親、自執工商、家專其業、皆不得入仕、の記述があり、卷三にも、工商之家、不得預於士とある。
- (19) 引用文中の傍点は、原文のままである。
- (20) 「全唐詩」以外で「陳情」の語を詩題に含む詩が、「全唐詩補逸卷十九」に二首ある。「七言記徳詩三十首謹獻司徒相公」の一首に「陳情」。また「陳情上太尉」。いずれも、唐末、新羅出身で唐に官職を得た崔致遠の詩であり、相手は高駢で、自己への恩顧と求職のニュアンスをもつ。

一般的に、詩人より上位の者であり、政府高官であつたりした。

そして、李白以外、ほとんどが、己の科挙及第を訴えるものであり、極端な話、科挙の主宰者である知貢奉に、自己の苦難な状況と及第を要請していたのであつた。そうでなくとも、間接的に、「知己」や有力者に、推輓を願うものであつた。それに付随しての、当座の「求職」ということもあつたのである。

しかし、ここで、時代的な言葉の使用の傾向や、グループを普遍化したり、抽象したりすることは、困難である。詩人が、その時々、何らかの考えで、表現の中で、個々に使用したと考えるほかはないのである。

もとより、詩題に「陳情」という語を有しない詩においても、唐代の人々は、及第や求職に関わる詩篇を、大量に作っていることは言うまでもない。科挙に関わる詩篇も、数多いのである。

では、何故、「陳情」という語を敢て使用したのであろうか。試験関係者や有力者の許には、多くの「行巻」や及第を願う詩篇が寄せられる。それらを、一一読んでいるわけではない。多くは打ち捨てられたろう。その中で、この見慣れない「陳情」という語を使用することによって、人目を引く、自己の存在への着目のきっかけとするという意図があつたと考えられよう。自己をアピールする契機という言葉であつたのかもしれない。科挙の登第は、人生の重大事であつた。「陳情」という言葉には、主に、己の人生の関門、科挙の及第を願う、受験者の切実な心情が込められていたのである。²⁰⁾

註

- (1) 「日本国語大辞典」第二版は、出所を「思美人」に誤る。
- (2) 題として、「表」の中に、六臣注本で李密の「陳情表」がある。ただ、李善注本では「陳情事表」である。祖母への孝の為、仕官を辞する内容の名篇である。本論の詩の「陳情」と異なり、散文である故、当面の考察からははずす。
- (3) 索引のある詩人で、三例を見出す。白居易「和微之詩二十三首并序 和我年三首之三」何当闕下来 同拜陳情表。張籍「贈孔尚書」三表自陳辭北闕、一家相送入南山。柳宗元「首春逢耕者」聊從田父言、款曲陳此情。前二者は、李密の陳情表を受け、最後の例は、単に情を陳べるという意である。
- (4) 六朝期に「陳情」の語を含む詩題は存在しない。遼欽立「先秦漢魏晉南北朝詩」による。
- (5) 詩の選本において、「陳情」は伝統的なテーマともならないが、文章において「文苑英華」卷六〇一、六〇二に、表「陳情」の項がある。李密の「表」の流れであろう。
- (6) 詩のテキストは、「全唐詩」(一九七九年、中華書局排印本)により統一する。
- (7) 以下、唐詩人の伝記や歴史資料は、通行する排印本などに拠るが、煩を避けて、出版社、出版年次等略す。
- (8) 顧非熊の人生と科挙については、拙論「顧非熊論」(東京経済大学人文自然科学論集第一〇七号)
- (9) 詩題は「賀顧非熊及第其年内索文章」「送顧非熊作尉盱眙」
- (10) 「唐宋詞人年譜」一九七九年、上海古籍出版社。
- (11) 「二年」は、「全唐詩稿本」、「唐音統籤」卷五七九、「温庭筠詩集」(四部叢刊)卷六、「温飛卿集箋注」卷六など、「二年」に作る。

関わる修辞や詩語がないことに注意しなければならぬであろう。唐代の詩人達にとって、科挙は、及第下第を問わず、人生の一つの関わりが語られる。また、詩において表現される。杜甫も、次のように、晩年の回想の詩の「壯遊」の中で、述べている。

忤下考功第 忤らいて考功の第より下ち

独辞京尹堂 独り辞す 京尹の堂

杜甫は、科挙の主管が、吏部の考功員外郎にあった頃、下第しているのである。また例えば、中唐期の韓愈は、この試験によって何回も苦汁を嘗めた。一方、同時代の白居易は、次々とクリアしていったのである。しかし、不思議なことに、李白という詩人には、その生涯において、科挙を受けた形跡が見い出せないのである。

そもそも、唐代ばかりでなく、中国の古典詩を代表する一人である、李白という詩人の生涯には、不明な点が多い。一つには、李白に官歴がほとんどないからでもある。出自、生年、父祖の事、自分の生業などの問題が、従来より議論されている。これらの点について、先人の研究が進められ、諸説あるが、科挙においては、一般的な次のような説が妥当な見解とされている。つまり、李白には、もともと、科挙を受験する資格がなかったたのであると。官僚となるべき人材を、広く自由に抜擢する科挙は、唐では毎年実施されたが、限定された身分の人は、官僚になる資格がなく、つまり、科挙の受験資格がなかった。李白の父親は「商人」であつたらしく、李白は

始めから、その門を閉ざされていたのである。¹⁸ 松浦友久博士は、「李白伝記論」の中の「李白における蜀中生活」の中で、「新唐書」選挙志に依りつつ、次のように結論する。

推論の経過としておのずから明らかなごとく、李白に関しては、第一には異民族出身（異類）であり、第二には、恐らく商人の家系（賈）であることによつて、当時の郷貢の枠組から完全に閉め出されていたと考えることができるわけである。科挙はかれにとつて、主体的に無縁である以前に、社会的に無縁であらざるをえなかつた、と見なければならぬ。¹⁹

民族的な出自の問題は、今、別に置くとしても、科挙と李白の関係の問題は、このような見解が、最も妥当であろう。李白の「陳情」に、科挙は始めから入っていない。科挙は始めから、縁のない世界であつたのである。

九

以上、「全唐詩」の中で、「陳情」の語を詩題に有する詩の分析を行つて来た。「陳情」の対象、「陳情」の内容、詩の成立時や場所、詩の抱えている問題などの検討を行つた。そしてまず、「陳情」を詩題に含む詩が、非常に稀少であることを指摘した。更に、詩の中の詩語としての「陳情」もまた、非常に稀であつた。「陳情」は、また全て個人が個人に贈つたものであつた。ただ、贈る対象の人は、

五言古詩である。換韻により、大きく四つの段に分れるが、その最初の一段である。詩題での「友人」が誰であるか、いつの作であるか等、全く確定できない。この一段は、春秋時代の呉の延陵の季札と、徐君の深い交情を語る、よく知られた故事を述べている。次の二段めも、「史記」の「管晏列伝」にある、春秋時代の管仲と鮑叔の故事である。いわゆる「管鮑の交わり」である。オーソドックスな、友情や知己の話を並べたに過ぎない。われわれの間もかくありたい、友情というのは古来こういうものだという願いである。次の第三段の一部から、かつては交友のあった李白と友人の間が壊われてしまった事が現わされる。

卜居乃此地 卜居 乃ち此地
共井為比隣 共井 比隣と為る
清琴弄雲月 清琴 雲月を弄び
美酒娛冬春 美酒 冬春に娛しむ
薄徳中見捐 薄徳 中に捐てられ
忽之如遺塵 之を忽にして遺塵の如し

かつては隣どうしの風雅なつきあい。突然、何かの理由で、二人の仲は割かれてしまったというのである。そして二人は遠く離れ離れになってしまった。

奈何成離居 奈何ぞ 離居を成す

相去復幾許 相去ること幾許ぞ

そして、もとの交友の復活を願うわけである。

所思採芳蘭 思う所 芳蘭を採り
欲贈隔荆渚 贈らんと欲して荆渚を隔つ
沈憂心若醉 沈憂 心 酔うが若し
積恨淚如雨 積恨 涙 雨の如し
願仮東壁輝 願わくは 東壁の輝きを仮り
余光照貧女 余光 貧女を照らさん

第四段の末の六句である。一度、何らかの理由で疎遠になった自己に、再び目をかけてくれるようにとの願いを綴る。貧女は、「列女伝」の斉女徐吾の故事であり、自己に喩えている。元に戻れば、季札と徐君、管仲と鮑叔のように、ということであろう。相手は、それなりに、実力者であり有力者と考えてよいであろう。その背後に、「求職」や「推輓」の意を考えても、誤りではない。

以上、李白の二首は、一首は、時の著名人への「述徳」を述べながら、表面的な言辞はないが、背後に、「求職」などの意図が潜む「陳情」である。更にもう一首は、故事を連ねつつ、「交友」の復活を願い、又背後に何らかの「推輓」や「推薦」の意を潜ませて「陳情」していると考えてよいであろう。

さて、ここで、已に見たような詩人達と異なつて、「科挙」というものの影が全くないことに注意しなければならない。「科挙」に

安祿山の乱が起ると、長安防備の要衝である潼関の守備に付いたが、敗退し、自らは捕虜となり殺害されたという経歴の人物である。そのため、この詩は、それ以前の、名声赫々たる時の作品であることは確かである。詩は、全てその功績や人物への賞賛を、誇大な修辭で羅列したものに過ぎない。漢の衛青も秦の白起も、この人物には遠く及ばないというのが末二句である。全篇、詩題の「述徳」に当るものであるが、李白が、何を言いたいのかの部分が欠落し、中途半端な印象があるのは否めない。

例えば、同時代の杜甫にも、「投贈哥舒開府翰二十韻」（哥舒開府翰に投贈す 二十韻）という排律の作があるが、これは内容的に、一つは、哥舒翰への賛仰と、一つは、幕僚への採用の嘆願であり、はつきりしている。

この詩は、あるいは、製作の途中で、八句でやめてしまった未完の詩篇かとも考えられるが、従来、この点について議論のある所である。王琦注「李太白文集」巻九に引く、劉世教は、次のように言う。

按此詩、述徳有之而無陳情之詞、疑有闕文。

按ずるに此の詩、述徳は之れ有れども、陳情の詞無し。疑うらくは闕文有るか。

このような意見に対して、現代の、例えば朱金城、瞿蛻園「李白集校注」の按語では、同じ趣旨の朱諫「李詩弁疑」を引いて言う。「投贈」というのは、つまり「陳情」であることを知らず、それは

「必ずしも疑わざる所を疑う」ということであると。「陳情」の部分の欠落を問題にする必要はないと言っている。

どちらが是とも判断できないが、ただ、「李白集校注」が、「述徳陳情」は、「唐人の権要に上る習用の語」としている点は、「述徳」はともかく、「陳情」の用例は、已に論じて来たように、非常に稀にしかなく、「習用の語」と言い切るのは、問題があろう。

「闕文」や表面的な「陳情」の表現の有無の問題はあるとしても、一人物への賞賛の詩を書き、これを「たてまつる」という背後には、自己の存在のアピールと、ひいては、「求薦」「求職」などの意味が入っている。そのような意味がなければ、わざわざこのような詩は書く必然性はないであろう。もともと、この詩を実際に「上った」のかどうか、「上った」としても、相手が読んだかどうかは、また別問題であるが。

陳情贈友人 陳情 友人に贈る

延陵有宝剑 延陵に宝剑有り

価重千黄金 価は重し 千の黄金

觀風歷上国 觀風 上国を歴

暗許故人深 暗に故人に許すこと深し

婦来挂墳松 婦来 墳松に掛け

万古知其心 万古 其の心を知る

懦夫感達節 懦夫 達節に感じ

壮士激青衿 壮士 青衿を激す

紫陌久慚行 紫陌 久しく行くを慚ず

続いての四句である。「雄文」は、行巻などで出す自己の詩文を言うであろう。故郷では耕すべき土地もないという。滄江で、南方の故里を指すであろう。「紫陌」は都の大通りで、「行くを慚ず」のは、下第の故である。科挙を通らないのである。

意縦求知切 意は縦いままに知を求むること切に

才惟懼鑑精 才は惟だ鑑の精なるを懼る

五言非琢玉 五言 琢玉に非ず

十載看遷鶯 十載 遷鶯を看る

ここで、喻坦之の受験歴が大体分る。概略、十年である。「遷鶯」とは、官僚の転任を指せば、その場にはない自己は、第三者として眺めているだけである。科挙は官僚になる関門である。「知を求む」に、自己の推薦者を求めていることが分る。そして、詩は自己の状況を詠じつつ、最後の四句でしめくくる。

獎善猶憐貢 獎善 猶お貢を憐れみ

垂恩必不輕 垂恩 必ず軽からず

從茲便提挈 茲れより 便ち提挈

雲路自生榮 雲路 自ら榮を生ぜん

自分に目をかけて頂き、科挙及第への恩を垂れるよう願うのである。

喻坦之は、今は名を特定できない、ある高官の御史中丞に、自己の科挙及第への力添えを「陳情」しているのである。そして、このよきな運動にもかかわらず、喻坦之は及第できなかった。

八

盛唐期を、杜甫とともに代表する李白に、二首の「陳情」の語を含む詩が存在する。一つは八句の七言古詩、一つは、四十四句に及ぶ五言古詩である。

述徳兼陳情上哥舒大夫 述徳 兼ねて陳情 哥舒大夫に上る

天為国家孕英才 天は国家の為に英才を孕む

森森矛戟擁靈台 森森たる矛戟 靈台を擁す

浩蕩深謀噴江海 浩蕩の深謀 江海に噴き

縱横逸氣走風雷 縱横の逸氣 風雷走らす

丈夫立身有如此 丈夫の立身 此の如き有り

一呼三軍皆披靡 一呼 三軍 皆 披靡

衛青謾作大將軍 衛青 謾に作る 大將軍

白起真成一豎子 白起 真に成る 一豎子

七言古詩である。詩題の「哥舒大夫」とは、哥舒翰であり、「旧唐書」卷一〇四、「新唐書」卷一三五に伝がある。西域や南方での武功著しく、当時著名であった武人である。天宝十四載（七五五年）、

当路公卿誰見待 当路の公卿誰か見て待たん
故郷親愛自疑非 故郷の親愛 自ら非なるかと疑う
東風乍喜還滄海 東風 乍ち喜ぶ 滄海に還るを
棲旅終愁出翠微 棲旅 終に愁う 翠微を出ざるを
応念無媒居選限 応に念うべし 無媒 選限に居るを
二年須更守漁磯 二年須く更に漁磯を守るべし

最後の第八首である。「丹霄」は已に第五首に見えた。「桂枝」は、科挙に関わる詩には常套の用語であり、「折桂」は及第を言う。「空しく桂枝を把りて帰る」、及第はしたが「空しく」、何もないのである。相変わらず、「前に依りて」、「布衣」、無位無官なのである。それ故、第四句で、親しい人々が、相変わらず「自ら非」、下第したのかと「疑う」と解せられる。それで、末句の「二年」また故郷で「居選の限」としても、解釈できないのである。また、「選限」の用例も、これ以外見出せないのである。恐らく、任官においても「媒」、推薦、仲立ちが必要なのだと言いたいのであろう。そこを、「陳情」しているのであり、副次的には、とりあえずの地位として、幕僚としての求職の含意があるかもしれない。

後に許棠は、任官している。宣州涇県の尉である。つまり、自分の故郷、南方の地方の県の、全官制からすれば、末端の県尉であり、土地の人にすれば、官である「お上」に違いないが、他につけるべきポストがなかったということもあろう。本質を避けていない。許棠のような、老いた長期下第者にとって、少なくとも中央省庁の榮

あるポストなどは、望むべくもないであろう。しかし、このポストが許棠の本望に叶ったのかどうか、分らない。

七

喻坦之は、晩唐朝の人であり、許棠と時を同じくした人である。許棠と京兆府試を受けている資料が今に伝わる。贈詩の相手の官職は、「御史中丞」であり、檢察機関である御史台の、高官であるが、誰であるかは、もとより不明である。詩は、全てで二十四句の排律である。

陳情 獻中丞 陳情 中丞に獻ず

孤拙竟何營 孤拙 竟に何をか營まん
徒希折桂名 徒だ希う 折桂の名
始終誰肯薦 始終 誰か肯て薦めん
得失自難明 得失 自ら明なり難し

最初の四句であるが、第二句で、既に、科挙及第への願望が現わされている。「折桂」は科挙及第をいう常套の表現である。

貢乏雄文獻 貢には雄文の獻ずるに乏しく
歸無瘠土耕 歸るに瘠土の耕す無し
滄江長發夢 滄江 長に夢を發し

丹霄待得白頭成 丹霄待ち得て白頭成る

己期到老還沾禄 己に期す 老に到るも還た禄に沾うを

無復偷閑却養生 復た無し 閑を偷みて却つて生を養うを

当宴每垂聴染涙 宴に当り毎に垂る 染を聴くの涙

望雲長起憶山情 雲を望み長に起す 山を憶うの情

朱門旧是登龍客 朱門旧て是れ 登龍の客

初脱魚鱗胆尚驚 初めて魚鱗を脱し胆尚お驚かん

第五首である。「一紀」は十二年で、「三紀」は三十六年。当然、大まかな数で、一句は、三十六年間科挙を受け続けたことを言う。

「丹霄」は「朝廷」あるいは「都」を言うが、それを「待ち得た」、つまり及第したと解してよいであろう。末二句の「登龍の客」が「魚鱗を脱す」にも表現されているし、第七首の、次の二句、

平生南北逐蓬飄 平生 南北 蓬飄を逐う

待得名成鬢已彫 名成るを待ち得て鬢已に彫む

にも、示される処である。「成名」とは、当然、及第を言うのである。しかし、長年の挑戦と老いを考えに入れても、一般的な科挙及第者の、天下を取ったような、人生の目的を全て果たしたかのような手放しの喜びが、これら四首の詩には欠落しているのである。許棠にとって、何が不足していたのであろうか。

この詩の第三句、第四句を子細にみれば、「禄に沾うことを期す」「閑を偷んで生を養う無し」と言うように、許棠は、俸禄を求め、

官職を求めたのである。科挙には通ったが、職、つまりポストがなかった、手に入らなかったと解してよいであろう。

科挙とは、高級官僚の選抜試験であり、広く人材を求める為のものである。唐代において、最も中核的なものは、礼部試の進士科であり、それを通過することが、最大の人生の目標であった。しかし、礼部試は、あくまで官僚たるの資質を判断する、資格試験であり、人事を握る吏部に名簿は移り、そこでの試験を通らねば任官できない。それが形式的なものとしても、実際の任用の際、果して三十年も四十年も下第し続けた人や老人につけるべきポストがあるであろうか。

長期下第者の大方が、礼部試を通り、この世の名譽を獲得し、それで事足れりとなるのであろうが、許棠は「官」になりたかったのである。「官」としての名譽と実利としての「俸禄」（給料）が欲しかったのだと考えられる。

唯恥旧橋題処在 唯だ恥ず 旧橋題せし処の在るを

榮帰無計似相如 榮帰 計の相如に似る無し

第六首の尾連のこの表現は、漢の司馬相如が、故郷を出る時、立身出世しなければ、帰郷の時、この橋は通らないと橋に記した故事に基づく。「榮帰」が、許棠にはないのである。

丹霄空把桂枝帰 丹霄空しく桂枝を把りて帰る

白首依前着布衣 白首 依前 布衣を着す

許棠の、もう一つの連作八首は、その内容から大きく明確に、前半の四首と後半の四首に、分けられる。前の四首は、詩題の「講徳」を詠じ、後の四首が「陳情」である。前者の第一首をあげれば、次のようである。

講徳陳情上淮南李僕射八首

講徳陳情 淮南の李僕射に上る 八首

天降賢人佐聖時 天は賢人を降して聖時を佐け
 自然声教滿華夷 自然 声教 華夷に滿つ
 英明不独中朝仰 英明独り中朝の仰ぐのみならず
 清重兼聞外国知 清重兼ねて外国の知るを聞く
 涼夜酒醒多対月 涼夜 酒醒め多く月に対し
 曉庭公退半吟詩 曉庭 公より退きて半ば詩を吟ず
 梁城東下雖經戰 梁城東下 戦いを經と雖も
 風俗猶伝守旧規 風俗猶お伝う 旧規を守ると

莊重な語彙を並べ、相手の人格や功業を、大らかに持ちあげて詠るのである。文学的な見地からすれば、齒の浮いたような措辞の連なりで、内容からすれば、無味乾燥の代物である。しかし、当事者にとっては、ここが大事な力の入れ所なのである。相手への賞賛に言を尽くすことが、「干謁」や「推輓」にとつて、まず前提となることである。「賢人」は、贈詩の相手であり、「声教」つまり、相手の声威と教化は、「華夷」、中国と蛮夷の地に滿ち渡るといふ。「英明」にして「清重」な人柄は、朝廷から外国まで響き渡っていると

いう、過大な表現であり、阿諛追従ともとれる言辭である。第五句、第六句は、この李僕射の清雅な生活を言い、最後の二句において、その政治的手腕、統治の功を賞賛しているのである。他の三首も、内容は、大同小異である。

なお、この「梁」が、「李僕射」の比定の一つの手掛りともなる。「梁」は汴州であり、宣武軍節度使の会府である。詩題の「淮南」は淮南節度使でよく、会府は揚州である。「僕射」は、尚書省の僕射であり、官品は從二品、もとより寄祿官であるが、高位の重職と言つてよいであろう。これは、官歴と時代から、李蔚としてよいであろう。「旧唐書」卷一七八「新唐書」卷一八一に伝を載せるが、「唐方鎮年表」卷五によれば、咸通十一年（八七〇年）から乾符元年（八七四年）にかけて、淮南節度使となっている。連作の第六首に、

東來淮海拜旌旗 淮海に東來し旌旗を拜す
 不把公卿一字書 公卿一字の書を把たず

とあるように、許棠との接触も、揚州であつたと考えられる。また、詩の内容から、咸通十二年春の及第以降とも考えられる。許棠は確かに及第した。しかし、後半四首の「陳情」の内容が甚だ曖昧であり、いわば、隔靴搔痒の感があり、表現も、奥歯に物のはさまつてあるかのようである。

三紀吟詩望一名 三紀詩を吟じ 一名を望む

八方塞がりの状況である。「名を求む」、これは科挙及第の意味であるが、ますます難しくなっている。それで、李常侍への嘆願となるわけである。第二首、第三首、第四首の尾連を順にあげよう。

不因趨大旆 大旆に趨るに因らざれば
誰肯暫提携 誰か肯て暫く提携せん

天地雖云広 天地 広しと云うと雖も
殊難寄此身 殊に 此の身を寄せ難し

此去吟雖苦 此より去らば吟苦しと雖も
何人更肯聴 何人か更に肯て聴かん

「提携」の相手、「此の身を寄せる」相手、「吟の苦しきを聴く」相手として、李常侍がいるわけで、求むる所は、第一に科挙及第への援助であり、副次的に当面の、幕客としての招きなども考えられよう。許棠は、それを「陳情」しているのである。

果して、その効果があったのかどうか、許棠の及第は、この連作詩が書かれた翌年の、咸通十二年（八七一年）であり、知貢挙は、中書舎人の高湜であった。

この連作五首の製作時は、第四首に関わっている。その前半の四句は、

春闈久已滞 春闈 久しく已に滞り
秋賦又逢停 秋賦 又停むるに逢う
選士疑長阻 選士 長く阻まるかと疑い
傷時自不寧 時を傷みて自ら寧からず

となっている。第一句の「春闈」は、礼部試のことを言う。第二句の「秋賦」は、秋貢であり、地方試である。それが、「又停むるに逢う」とは、どういうことか。実は、咸通十一年（八七〇年）には、礼部試は実施されなかつた。長安での省試、科挙はなかつたのである。「旧唐書」巻十九の懿宗紀に、咸通十年十二月、兵戈の影響のため、一年、礼部試を停める詔勅が出されたことを載せる。つまり、「秋賦を停」めたのである。また、翌、咸通十一年四月にも詔勅が出ている。一部を引くと、次のようである。

去年属以用軍之際、權停貢舉一年。今既去戈、却宜仍旧。
去年属するに軍を用いるの際を以て、貢挙を權停すること一年。
今既に戈を去れば、却つて宜しく旧に仍るべし。

これによっても、咸通十一年の科挙は無かつたことがわかり、「登科記考」巻二十三も、「停挙」とのみ記す。詩の第一句は、長年の自己の下第をいうと解される。第二句は、この時の措置を踏まえ、第三句で、停止状態が長びくことへの不安を述べているわけである。結果としては、翌年、咸通十二年に、礼部試は実施され、許棠はようやく及第者の中に入ったのである。

唐代の「陳情」の詩について

巖荒噴月泉 巖は荒る 噴月の泉

東堂曾受薦 東堂 曾て薦を受く

垂白志猶堅 垂白 志は猶お堅なり

五律の第一首である。「江西」は江西觀察使と考えてよいであろう。

「常侍」は、中書省門下省の「散騎常侍」であるが、もとより使職が帯びる寄禄官である。因みに従三品の高官である。当時の使職と許棠の人生を擦り合わせると、李隲の名が挙がり、この詩の相手はこの人と考えてよいであろう。会府は洪州である。許棠の故郷である宣州涇県と、相対的には近い¹³。李隲は、新旧の「唐書」には伝がないが、「唐方鎮年表」巻五によれば、咸通九年（八六八年）から十一年（八七〇年）に、赴任している。例えば、第四首の「楚徼」、第五首の「越鳥」「蛮花」などの語から、許棠の南方への帰省や旅中での出会い、あるいは治所の洪州での製作と考えられる。

許棠は、自己の身の定まらないこと、つまり、科挙に下第し続けている状況が、已に二十二、三年に及んでいると言う。第二句の「燕に滞る」の内容は分らないが、「秦に遊ぶ」の目的は、長安での省試であろう。この寄辺ない不安定な状況は、第二首の冒頭の、

浙浙復棲棲 浙浙 復た棲棲

人間只自迷 人間 只だ自ら迷う

によく現われていよう。確固たるものがない、中途半端な状況である。科挙に及第していないことは、第三首の冒頭に、明確に叙述さ

れている。

童蒙即苦辛 童蒙 即ち苦辛

未識杏園春 未だ識らず 杏園の春

「杏園」は、このような場合、単なる「あんずの園」ではない。唐の長安の東南方向、通善坊にあった園林である。しかし、ただの園林ではなく、曲江池や慈恩寺などとともに、唐代科挙においては、及第者達の祝賀遊宴の場なのであり、春の盛りのこの盛宴は、長安の風物詩でもあった。¹⁴「未だ識らず」、つまり自分に縁のないものであり、及第の喜びを知らないということである。

第一首の第三句は、自己の才の無さの卑下であり、第四句は、この生の苦しみである。第五句、第六句の景物が、具体的にどこなのか、何を意図しているかは、明確でない。許棠が隠棲している地の、寂寥とした風景であろうか。いささか、詩の文脈の連環が滞るが、末二句の意味は明瞭である。「東堂」は試験場のことである。かつて、この李常侍に推薦を受けたという。旧知であったのである。その人物が、南方へ赴任して来たのを知ったの、この詩の製作ということも考えられる。末句では、年老い白髪となっても、「志」は不変であると、初志の貫徹を述べるのである。しかし、現実、第五首の冒頭にあるように、

孤立時全塞 孤立 時に全く塞がる

求名勢転難 求名 勢は転た難し

を作るに、凡そ八たび手を叉して八韻成り、時に温八又と号す。多く隣鋪の為に手を仮し、号して救数人と曰うなり。

引用は、前半で、詩人の才能の豊かさを示している。更に、隣席の受験者の答案作製に手を貸したという、特異なエピソードを記す。

「唐詩紀事」の別の条では、困った試験主宰者が、温庭筠の席を別にしたという話を載せている。

そして、更に、平素の交遊や生活ぶりだが、大方の響蹙を買うことになる。「旧唐書」卷一九〇では、次のように記す。

初至京師、人士翕然推重。然士行塵雜、不修辺幅。能逐絃吹之音、為側艷之詞。公卿家無頼子弟裴誠令狐縞之徒、相与蒲飲、酣醉終日、由是累年不第。

初めて京師に至るや、人士翕然として推重す。然れども士行塵雜、辺幅を修めず。能く絃吹の音を逐い、側艷の詞を為る。公卿の家の無頼の子弟の裴誠令狐縞の徒、相与に蒲飲し、酣醉すること終日、是に由りて、累年第せず。

たとえ才能があろうとも、全体的な人間判断によって、最終的選抜を行うという、唐代の科挙の理念からすれば、このような平素の素行の悪さや悪評は致命的であろう。何らかの契機で「無頼」に成り果てたのか。逆に自分が、科挙に通らないという自覚が、更に輪をかけたのか。その辺の事情は分らないが、結局、科挙に及第することなく、節度使の幕僚を転々とし、地方の末端の官の方城の県尉な

どを経、華やきも無く終る。「唐才子伝」卷八はその人生の最後を、

竟流落而死。

竟に流落して死す。

と、手厳しく記す。最後は、落ちぶれて死んだという意である。

この李僕射への「陳情」の詩は、その人生の比較的若い頃で作であろうが、自己の求職あるいは、広く科挙への推輓を求めるものであったのである。

六

晩唐期の人許棠には、「陳情」の語を含む二つの連作詩があり、このような例は、ただでさえ稀な「陳情」の語を含む唐代の詩篇の中で、特異にして唯一のものである。一つは五言律詩の連作五首、一つは七言律詩の連作八首である。

陳情献江西李常侍五首 陳情 江西の李常侍に献ず 五首

二十二年 二十二年

遊秦復滞燕 秦に遊び復た燕に滞る

徒陪群彦後 徒らに陪す 群彦の後

自苦此生前 自ら苦しむ 此の生前

径折啼猿樹 径は折る 啼猿の樹

の秋に病のため、翌年の省試に及ばなかったことがわかる。また、この詩の第三十六句「名亦濫吹竽」（名も亦濫りに竽を吹く）にも、先の詩と同じく自注が付されている。

予去秋試京兆薦、名居其副。

予 去秋 京兆の薦に試みられ、名は其の副に居り。

ここで、先の李僕射への「陳情」の詩も、開成五年（八四〇年）の作と考えてよいであろう。そして、前年の科擧の登第はなく、今年も、郷貢に及ばなかったわけである。

「陳情」の詩に戻れば、詩は更に、自己の静かな、あるいは逼塞した生活環境を述べた後、自己の「推轂」「求乞」の情へと筆を転ずるのである。第八十三句から第九十二句は以下の通りである。

鄭郷空健羨 鄭郷 健羨空しく

陳榻未招延 陳榻 未だ招延せず

旅食逢春尽 旅食 春に逢いて尽き

羈遊為事牽 羈遊 事の為に牽かる

宦無毛義檄 宦に毛義の檄無く

婚乏阮修錢 婚に阮修の錢乏し

冉弱營中柳 冉として弱し 營中の柳

披敷幕下蓮 披きて敷く 幕下の蓮

儻能容委質 儻し能く委質を容るれば

非敢望差肩 敢て差肩を望むに非ず

「旅食」や「阮修の錢」に、経済的な困窮を語っているが、このような詩では、常に見られる表現であろう。「招延」「營中」「幕下」「委質」などの語から、作者は、とりあえず、節度使の幕僚としての採用を願っているとも考えられる。その背後には、当然、科擧への推薦ということも含まれていよう。この詩は、次の二句で結ばれる。

韶光如見借 韶光 如し借られれば

寒谷變風煙 寒谷 風煙を變ぜん

「韶光」（日の光）は、相手の恩顧を言うであろう。目をかけて頂ければ、「寒谷」、作者の今の状況は、よい方へ変化してゆくであろうと結ぶのである。この詩は、科擧の不如意を踏まえ、旧知の有力な高官に対して、自らの窮状を訴え、何らかの職、ひいては科擧への力添えを「陳情」しているのである。

温庭筠は、科擧を受け続けるが、試験場の名物男となり果てる。

その豊かな才能と実人生の無軌道振りは、正史や史料類に多く記されている。「唐詩紀事」巻五十四から、一例をあげれば、次のようである。

庭筠才思艷麗、工於小賦。每入試、押官韻作賦、凡八叉手而八韻成、時号温八叉。多為隣鋪飯手、号曰救数人也。

庭筠は才思艷麗、小賦に工なり。試に入る毎に、官韻を押しして賦

抑揚中散曲 抑揚 中散の曲

漂泊孝廉船 漂泊 孝廉の船

未展干時策 未だ展べず 干時の策

徒抛負郭田 徒だ抛つ 負郭の田

軫蓬猶邈爾 軫蓬 猶お邈爾たり

懷橘更潛然 懷橘 更に潛然たり

投足乖蹊逕 投足 蹊逕に乖い

冥心向簡篇 冥心 簡篇に向う

未知魚躍地 未だ知らず 魚躍の地

空愧鹿鳴篇 空しく愧ず 鹿鳴の篇

稷下期方至 稷下 期方に至るも

漳浜病未痊 漳浜 病未だ痊えず

第五十七句から第七十句までである。「無媒」は、唐代科挙に関わる詩に、よく見られる表現である。自己を推挙する人、自己を見出ししてくれる人がいないということである。「漂泊」にせよ、「軫蓬」にせよ、定めない自己の状況が比喩的に示されている。そして、科挙との関わりが最もよく現われているのが、第六十八句の「空しく愧ず 鹿鳴の篇」であろう。「詩経」の小雅の鹿鳴は、「郷貢」を都に送る時歌われるものであり、それに対して「空しく愧ず」というのである。つまり、都での本試験である礼部試の不如意を言っているのである。それは、また、第七十句に表出されている「病」とも関わるであろう。そして、この二つの句には、原注が存在するのである。「空愧鹿鳴篇」の句には、

東京経済大学 人文自然科学論集 第二二〇号

余嘗忝京兆薦、名居其副。

余嘗て京兆の薦を忝くし、名は其の副に居り。

「京兆府」、つまり長安での推薦を受け、「名」は第二位にあったのだと解せられる。また、「漳浜病未痊」の句に対しては、

一年抱疾、不赴郷薦試有司。

一年疾を抱き、郷薦に赴きて有司に試みられず。

これによれば、一年前は、京兆府試までに行つたのだが、今年は、病が続いて、郷試も放棄したのだと解せられる。

この排律五十韻と対になるような、更に長大な詩が、温庭筠の詩集の中で、この詩の直前に存在する。詩題と序文を挙げれば、次のようである。

病中書懷呈友人并序 病中書懷 友人に呈す 并序

開成五年秋、以抱疾郊野、不得与郷計偕至王府。將議遐適、隆冬自傷。……

開成五年の秋、郊野に疾を抱えるを以て、郷計と偕に王府に至るを得ず。將に遐適を議せんとし、隆冬自ら傷む。……

この一百韻の作品が、開成五年（八四〇年）の嚴冬の作であり、そ

九

う。しかし、知貢挙の近辺に居る有力者とも考えられ、もとより、贈詩の相手は、判然としない。姚鵠はこの詩で、知貢挙あるいはその近くで及第を左右しうる有力者に、自己の礼部試での及第を「陳情」したのである。

五

感旧陳情五十韻 猗紹淮南李僕射 感旧 陳情五十韻 淮南の李僕射
に献ず

嵇紹垂髻日 嵇紹 垂髻の日
山濤筮仕年 山濤 筮仕の年
琴樽陳席上 琴樽 席上に陳ね
紈綺拜牀前 紈綺 牀前に拜す
隣里纒三徒 隣里 纒かに三徒
雲霄已九遷 雲霄 已に九遷
感深情恂恂 感深く 情は恂恂
言発涙潺湲 言発して 涙は潺湲

作者の温庭筠は、李商隱、杜牧と並ぶ、晩唐期を代表する詩人であるが、その人生は蹉跎に満ちている。五十韻、百句に及ぶ長大な詩の最初の八句であるが、「感旧」（旧に感ず）が、この贈詩の相手とのかつての交わりを示している。「淮南」は、このような場合、淮南節度使のことである。「僕射」は尚書省の僕射であり、従二品に当る高官である。もとより使職の寄祿官であるが、李僕射とは誰で

あるうか。温庭筠の生きた時代と淮南節度使となった人との関係から、自ずと絞られてこようが、諸説あり、一定しない。「温飛卿集箋注」巻六で、顧嗣立が指摘するのは、李蔚である。また、「温飛卿繫年」で、夏承燾が考証するのは、著名な政治家の李徳裕である。⁽¹⁰⁾「唐才子伝校箋」は、李紳に比定するが、その簡譜によれば、温庭筠の最初の科挙受験が、開成五年で、年が四十歳となつてしまふ。この年では、遅すぎる嫌があるが、いずれの人も、この李僕射は、決められないのである。

冒頭の「嵇紹」で自己を、「山濤」で李僕射を比喻しているが、「垂髻」の幼い日、「牀前に拜す」と、温庭筠は李僕射と出会っていることを述べる。相手は、今は、文字通りの「雲の上の人」であり、様々なことを思えば、涙は「潺湲」として、さめざめと流れ出るという内容である。そして、続けて、

憶昔龍凶盛 憶う昔 龍凶盛んにして
方今鶴羽全 方今 鶴羽全し

と、詩は典故を連ねて重畳と叙せられるが、第五十六句、すなわち二十八韻めまでが、この李僕射の人生の事跡とその人徳への賞賛である。このような場合の決まった一つのパターンである。莊重な修辭の後に、転じて、自己の不遇と悲哀の状況へと転じるのである。

有客將誰託 客有り將に誰にか託せん
無媒窃自憐 媒無く窃かに自ら憐れむ

このような一徹な意志の存在があつたのであろう。科挙及第が、至上の目的なのである。

そして、劉徳仁は「陳情」の詩を続ける。

此生如遂意 此の生 如し意を遂ぐれば

誓死報知音 誓死 知音に報いん

上徳憐孤直 上徳 孤直を憐れみ

唯公拔陸沈 唯だ公のみ陸沈を抜く

第十九句から第二十二句である。何とか自分に、力添えを願えないかということ述べる。劉得仁は、かつて知貢挙を経験したこともある、政府の有力者に、自分を認めて合格への力添えをしてほしいと、「陳情」しているのである。しかし、長年のこのような努力にもかかわらず、生涯、及第することはなかったのである。

四

感懐陳情 感懐陳情

恩重空感激 恩は重く感激空し

何門誓殺身 何れの門にか殺身を誓わん

謬曾分玉石 謬りて曾て玉石に分けられ

竟自困風塵 竟に自ら風塵に困ず

東京経済大学 人文自然科学論集 第二二〇号

陰谷非因暖 陰谷 暖に因るに非ざれば

幽叢豈望春 幽叢 豈に春を望まん

升沈在言下 升沈 言下に在り

応念異他人 応に他人に異なるを念うべし

姚鶴の詩であるが、相手が誰かは、判然としない。第三句、第四句の表現から、科挙に於じて下第している状況であることは、明確であろう。第八句の「幽叢」は「陰谷」にいる自らの比喩であり、「暖」、つまり恩顧を求めているのである。「春」は、科挙の及第のことを言っている。「升沈」は、合否ともとれるが、「言下」の解釈に困難が残る。しかし、あなたの力添えによって「升沈」が決まるのであるとの切迫した表現が、第七句、第八句である。

姚鶴は、会昌三年（八四三年）に、及第している。知貢挙は、吏部尚書の王起である。その時の、謝礼の詩が今に残る。この詩の第一句、第二句を挙げれば、次のようである。

三年竭力向春闈 三年 力を竭して春闈に向う

塞断浮華衆路岐 浮華を塞断し路岐衆し

〔及第後上主司王起〕

「春闈」とは、礼部試である。ここで、姚鶴の受験過程の概略が分る。「三年」という、比較的短い期間である。仮に「陳情」の詩が、知貢挙にあてた詩とすれば、会昌三年（八四三年）及第時の王起、会昌二年（八四二年）と会昌一年（八四一年）の柳璟が考えられよ

唐代の「陳情」の詩について

のポストは、礼部侍郎であり、劉得仁のこの詩の肩書きとは合致しない。「大夫」は、檢察機関である「御史台」の御史大夫であり、「旧唐書」によれば、大中十一年（八五七年）に任ぜられており、吳廷燮の「唐方鎮年表」巻六では、大中十二年（八五八年）五月に、劍南西川節度使に赴任している。この詩は、おそらく、その間の長安での作であり、自己の不遇と力添えを依頼するものである。有力者に、自己を推輓してもらい、試験関係者、最終的に知貢挙に情報を持って行ってもらうこと、これが、唐代科挙受験者の行動である。ただ、劉得仁が、一般の受験者と異なっているのは、この詩の次の詩句につけられている自注の内容である。

辛苦文場久 辛苦 文場に久しく

因縁戚里深 因縁 戚里に深し

老迷新道路 老いて迷う 新たな道路

貧売旧園林 貧にして売る 旧園林

第九句から第十二句までである。「文場」とは試験場である。そして「因縁」の句に自注が存在する。

親弟大中元年尚主 親弟 大中元年 尚主

大中元年は八四七年。「尚主」とは、皇帝の娘と結婚することである。この兄弟達について、例えば、「唐摭言」巻十は、

昆弟皆歴貴仕 昆弟 皆 貴仕を歴す

あるいは、「唐才子伝」巻六では、

昆弟以貴戚皆擢頭仕

昆弟 貴戚を以て皆 頭仕に擢でらる

と述べている。兄弟は皇帝の親戚ということ、具体的には分らないが、良いポストに就いているのである。苦勞の果てに、科挙を受けて任官する程のことでもなかったであろうが、劉得仁は、科挙を受け続けるのである。自らも、

如病如癡二十秋 病の如く癡の如く二十秋

〔省試日上崔侍郎四首之二〕

と語っている。この時点で、概略二十年である。この心情原理は、何であろうか。おそらくは「名」であろう。詩人にとっては、科挙に通ることが自己目的化し、及第が人生の無上の榮譽となってしまうのである。己のアイデンティティーの実現が、それしかないのである。「唐才子伝」では、次のように、劉得仁の心情を叙述する。

嘗立志。必不獲科第、不願僮人之爵也。

嘗て志を立つ。必ず科第を獲ざれば、僮人の爵を願わずと。

万一冀哀憐 万一にも哀憐を冀う

と結び、自己の及第を頼み込んでいるのである。

しかし、鄭澣のもとでは、結局及第しなかった。顧非熊の下第は、例えば、「唐摭言」巻八に、

非熊既為所排、在挙場三十年、屈声聒人耳。

非熊既に排する所となり、挙場に在ること三十年、屈声 人の耳に聒し。

とあるように、排斥の結果、長期に度り、及第そのものが自己目的化してゆく。結局、会昌五年（八四五年）、知貢挙の陳商の下で及第が叶ったのである。先の「陳情」の詩が書かれて後、更に十五年後のことである。この詩は、顧非熊という人物が、その長大な受験過程の中頃に、知貢挙の鄭澣へ、自己の及第を、直接「陳情」したものであったのである。

顧非熊への贈詩を二首残し、現在にその交遊の一端を見せているのが、劉得仁である。その「陳情」を含む五言律詩は、「陳情上知己」（陳情 知己に上る）という題である。「知己」の姓名、製作時など分らないが、第一句と第二句に

性与才俱拙 性は才と俱に拙く

名場迹甚微 名場 迹甚だ微なり

とあり、己を卑下しつつ、「名場」つまり科挙の試験場での不如意を伝えている。そして、第五句、第六句で、

刻骨搜新句 刻骨 新句を搜すも
無人憫白衣 人の白衣を憫れむ無し

というように、自らの詩文製作への苦心と、現実に仕官できない自分への、人々の無視を述べている。知己に自らの状況を理解してもらい、知己を通しての試験関係者への間接的働きかけを期待しているのだと考えてよい。この「陳情」は、己の状況の憐れさを点綴しつつ、最終的には、科挙及第への力添えの頼みなのである。

劉得仁のもう一つの詩は、二十八句の長編である。論点に必要な詩句を取りあげる。

陳情上李景讓大夫 陳情 李景讓大夫に上る

一被浮名誤 一たび浮名に誤られ
旋遭白髮侵 旋ち白髮の侵すに遭う
裴回恋明主 裴回 明主を恋い
夢寐在秋岑 夢寐 秋岑に在り

詩題と最初の四句である。贈詩の相手の李景讓は、「旧唐書」巻一八七と「新唐書」巻一七七に伝記を残す高官である。李景讓は、一度、開成五年（八四〇年）に知貢挙になっている。しかし、この時

唐代の「陳情」の詩について

それは、自己の推輓者がいない事を言うが、それ故、知貢挙への贈詩という直接行動があったと考えられる。「八百人」は、礼部試の受験者の大まかな数であり、唐代科挙の一資料ともなる。その中で「施」という姓の受験者は、自分一人であると、注意を喚起するわけであり、この表現は異彩である。別の角度から見れば、作者は、他の受験者の姓に限っても、全て把握していたという事になる。この辺りにも、知り合いがないという事が、アピールされているわけである。そして、唐代科挙の進士科の及第者数は、大体、年平均三十人前後であった。

第三句、第四句は、典故の追求が難しく、また、「攢箭」は、他に用例が無く、くつきりと意を握み難い。「弱羽」(弱々しい鳥)、「蹇驢」(足の悪いロバ)は、自己の比喻としてよいが、この二句からは、何らかの危難を象徴していると考えられる。

第五句、第六句も、意を挿え難いが、「貧女」が、「列女伝」の齊女徐吾を踏まえつつ、自己を喩えていよう。要は、第三句から第六句まで、自己を取りまく苦難の状況を考えればよい。

第七句、第八句で春の到来を求めている。つまり、科挙の及第である。「従来受恩」の表現からすれば、作者とこの礼部侍郎は、以前からの知り合いと考えてよい。自分への、更なる恩顧を願うという意である。施肩吾は、科挙受験途上のある年、相手は誰であるか断定できないが、自己の及第を、「陳情」しているわけである。

三

陳情上鄭主司 陳情 鄭主司に上る

登第久無縁 登第 久しく縁無し
帰情思渺然 帰情 思い渺然たり
芸慚公道日 芸は慚ず 公道の日
身賤太平年 身は賤し 太平の年

晩唐期の顧非熊の、全てで二十八句ある詩の最初の四句である。詩題の「主司」とは、礼部試を主管する知貢挙のことである。この詩は明確に、試験の主宰者に、直接あてた詩である。顧非熊の大体の生存年と、各年の知貢挙を突き当てれば、鄭澣という人物が浮ぶ。「登科記考」巻二十、二十一によれば、大和三年(八二九年)と大和四年(八三〇年)に知貢挙となっている。官は礼部侍郎である。この詩は、このいずれかの年かあるいはその前年に書かれたものである。またこの詩の中の表現で、

秦城春十二 秦城 春十二
吳苑路三千 吳苑 路三千

とあるように、已に連続していれば、受験歴十二年、そうでなければ十二回と、言っている。第一句に言えるように、「登第 久しく縁無し」の状況にあるわけである。そして、最後の二句で、

懇情今吐尽 懇情 今吐き尽す

四

唐詩」の中で、廖廖として、わずかに二十二首である。^④ 作者と詩数を、「全唐詩」に収められている順に、列挙すれば次の通りである。

李白、二首。施肩吾、一首。顧非熊、一首。劉得仁、二首。姚鵠、

一首。温庭筠、一首。許棠、連作五首と連作八首。喻坦之、一首。

盛唐の李白、晩唐の温庭筠以外は、通常の文学史にも登場しない、マイナーなあるいは無名の作者ばかりである。李白が盛唐期の人である他は、殆んど晩唐期に生きた人々である。一体、彼らは、これらの詩によって、何を「陳情」しているのであろうか。本論は、これらの詩篇を一つ一つ分析解釈してゆくことにより、それぞれが、誰に何を「陳情」しているのかを明らかにするのが目的である。長編の場合や連作の場合などは、詩全てを掲げることにはせず、若干の煩鎖な考証をしつつ、上記の順に考察する。ただ、行論の都合上、李白を最後にとりあげることとする。

二

上礼部侍郎陳情 礼部侍郎に上る 陳情

九重城裏無親識 九重城裏 親識無く

八百人中独姓施 八百人中 独り姓は施

弱羽飛時攢箭險 弱羽飛ぶ時 攢箭険しく

蹇驢行处薄氷危 蹇驢行く处 薄氷危うし

晴天欲照盆難反 晴天照らさんと欲して盆反り難く

貧女如花鏡不知 貧女花の如きも鏡は知らず

東京経済大学 人文自然科学論集 第二二〇号

却向從來受恩地 却って向う 從來受恩の地
再求青律變寒枝 再び青律を求めて寒枝を變せん

中唐から晩唐にかけての施肩吾の詩である。^⑤ 全体として、言わんとする所は、明確であるものの、部分的に判然としない所のある詩である。詩題の「礼部侍郎」は、政策施行官庁である「六部」の一つ、「礼部」の副大臣である。唐代の科挙においては、通例として、科挙の主宰者、「知貢挙」となり、最終的な、合否の決定者となる。しかし、これが誰であるか、断定できない。施肩吾は、元和十五年（八二〇年）の登科及第であり、知貢挙は、太常少卿の李建である。登第を願う内容であれば、もとよりそれ以前の作品であろう。因みに、徐松の「登科記考」によれば、施肩吾及第時に最も近い「礼部侍郎」の知貢挙は、元和十年の崔群、元和九年の韋貫之があげられるが、もとより断定はできない。

「唐才子伝」巻六は、何らかの思い込みからか、この詩を知貢挙に及第を感謝する詩として、語を入れかえてしまった。^⑥ すなわち、「謝礼部陳侍郎」として最初の二句を引用するが、これは誤りであり、傅璇琮主篇「唐才子伝校箋」が、「陳侍郎」でなく、及第時の李建に感謝する詩であるとして、もとの「唐才子伝」のテキストを、訂正するのも、また更なる誤りである。「唐才子伝校箋」は、第五冊の補正が正しい。なぜならば、全体の内容を吟味すれば、まだ作者は、科挙に及第していない事が明らかであるから。

詩の第一句、第二句は、奇抜な表現である。「九重」は、宮殿、すなわち朝廷や長安を指す。親しい知り合いがない嘆きである。

理由、意見などを述べることに。真情を述べ訴えること。

ただ、これだけである。文語を含む、中国で最も規模雄大な「漢語大詞典」では、次のようである。訳して示す。

真情を述べ訴えること。

これだけである。先の「現代漢語詞典」の語釈の後半部の原文、この「漢語大詞典」の語釈の原文を、日本の常用漢字で示せば、次の四文字にすぎない。

陳訴衷情

つまり、中国では、古往今来、日本での一般的使用である、「公的機関に、意見や要望を出す」という意味は、特にないのであり、日本での独自の意味が付加し、普及している漢語の一例であろう。

では、この言葉の中国での最も古い使用例は、何であろうか。それは、紀元前、戦国時代、楚の国の屈原の作とされる「楚辞」であり、その「九章」の「惜往日」である¹⁾。

願陳情以白行兮 得罪過之不意

情を陳べて以て行を白かにせんと願いて、罪過を得んとは之れ意わざりき。

王逸の注は、次のようである。

列己忠心所趨務也

己の忠心の趨き務むる所を列するなり

「列」(ならべる)に、「陳」の本来の意味が説明されているよう。また、朱子の「集註」では、「自明也」(白は明なり)とあり、「白」は「あきらかにする」という意である。

「楚辞」の中で、「陳情」の語の使用は、実はこの一例にしかすぎない。「陳」に多少の重みがあるとしても、「一を一する」という叙述の言葉であることや、その背後にストーリーをもつ象徴的な言葉でもない。そのため、後の時代の詩文の中で、例えば、「揺落」という言葉があれば、即、「楚辞」の「九弁」の

悲哉秋之為氣也 蕭瑟兮草木揺落而変衰

悲しいかな秋の氣為るや、蕭瑟として草木の揺落して変衰す。

が、想起されなければならないような「典故」でもない。伝統的に、詩語として受け継がれた、使用されて来た言葉でもないのである。例えば、「文選」の詩賦や文中には見えない²⁾。また、唐代の主要な詩人の詩を通観しても、その使用例を殆んど見ないのである³⁾。

このような「陳情」という言葉であるが、唐代の詩篇を見る時、詩題の中で使用しているものが存在する。しかし、五万首近い「全

唐代の「陳情」の詩について

松岡 秀明

一

「陳情」という言葉は、現代の日本においては、例えば、市役所や町役場へ「陳情」するというように使われるのが、一般的である。上は、中央省庁での予算獲得の「陳情」であったり、下は町内の生活改善や紛糾処理の「陳情」であったりする。このように、日本語の中では、相手が、公的な意味を持っている。もともと

情を陳(の)べる

という意味であるが、日本では、個人が個人に気持ちを伝えるという意味では、使わないのが普通である。異性に対して、愛を「陳情」するとは言わないし、友人に、借金を「陳情」するとも言わない。相手が個人としても、公的な職の場合であろう。

国語の辞典では、一応、単純な「情を述べる」という意味も載っている。例えば、「広辞苑」第四版での語義は、次のようである。

- ① 実情を述べること。心事を述べること。
- ② 実情を述べて、公的機関に善処を要請すること。

東京経済大学 人文自然科学論集 第二二〇号

更に、日本で最も規模の大きい、「日本国語大辞典」第二版では、次のようである。

- ① 上位の者の好意を期待して、心情を述べたり、事の次第を訴えたりすること。

- ② 中央や地方の公的機関に、実情を訴えて一定の施策を要請すること。

そして、同辞典では、「陳情運動」「陳情書」「陳情団」などの言葉を見出し語として挙げている。

では、翻えって、中国では、どのようであろうか。現代中国語の最も標準的な中型の辞書である「現代漢語詞典」2002年増補本の「陳情」の語義を、訳して示せば次のようである。なお、この書名は、日本の常用漢字で記した。

一